

〈ショール〉と〈どくろ〉

— 『三ギニー』における性的差異の再編成

片山 亜紀

I. 序— 〈ショール〉と〈どくろ〉の説得術

「でも、キャム、あれはただの年とった豚よ」とラムジー夫人は言った、「農場の豚みたいな黒豚さんよ。」しかしキャムには、部屋のあちこちから自分に向かって伸びてくる、おっかないもののように思えた。

「じゃあ、いいわ」とラムジー夫人は言った、「すっかり覆ってしましましょうよ」、それでみんなは彼女がたんすの方へ行き、手早にひきだしを次から次へとあけてゆくのを見守り、夫人は適当なものがないのがわかると、手早く自分のかけていたショールをとり、どくろに巻きつけ、ぐるぐる、ぐるぐると巻きつけ、それからキャムのところに戻り… (TL,154)¹⁾

本稿の目的は、ヴァージニア・ウルフが『三ギニー』(1938)において性的差異の組み替えを提唱するとき、いかに戦略的にレトリックを駆使したかを理解することにある。まず初めに、本稿での議論の手掛かりとして、より読者になじみ深い『燈台へ』(1927)から同様の説得術を紹介したい。

『燈台へ』第一部には、ラムジー夫人が晚餐を終えて子供部屋を覗いてみると、先に寝ていたはずの末の子供たち、ジェームズとキャムがまだ起きてむずかっているという場面がある。原因は壁に飾られた黒豚のどくろにある。ジェームズは誰にも触られまいとし、キャムは角の影が怖くて眠れない。どくろはしっかりと釘で打ちつけてある。夫人の説得術とは、自分のショールでどくろをすっかり覆うことであった。術は功を奏して、二人は眠りにつく。

ラムジー夫人は「おっかない」どくろを引き剥がすでもなくこの妥協案を選ぶことによって、子供たちを納得させると同時に、ともかくも「おっかないもの」が世の中に存在していること、手持ちのショールを巻きつけてそれも受け容れられるものに変質することを、わ

たしたちに知らせているといえる。同小説に登場する絵描きのリリー・ブリスコーは、ラムジー夫人のふるまいからそうした意味を汲み取って、「自分も同じことを絵の分野で試みよう」と決意する。とすれば『燈台へ』とは第一部でラムジー夫人がショールを巻き、第二部で夫人の死と戦争とがショールをほどいてどくろを露出させ(「なんでまあこんなところに動物のどくろを掛けたがったのかね。これもかびが生えちまってる」「目的もなく、あてもなく、揺れるショールはゆらゆらとした」)、第三部でリリー・ブリスコーがキャンバスの上にほどけたショールを描き込んでみせる物語である。「不意に激しく、瞬時にくっきりと見てとったかのように、リリーはそこ、真中に線を描いた」(TL,186,187,281)。リリーはショールの表象を通してラムジー夫人の説得術を継承されるものにする。作者ウルフはそのリリーの表象を通して自分の書き手としての立場——「おっかないもの」に迫りつつそれを変質させようとする立場——を表明している。

わたしが『燈台へ』を引いてきたのは、このショールでどくろを包み込む説得術が、『三ギニー』の中心的レトリックである、迂言法(periphrasis)をうまく説明しているからである。装飾的かつ修辭的な言説を〈ショール〉、批判的かつ危機的な論点を〈どくろ〉と呼ぶならば、『三ギニー』の議論においても、〈ショール〉はいくつかの〈どくろ〉に巻きつけられ、ほどかれ、「おっかない」〈どくろ〉を変質させる。わたしは以下において、こうした言葉の動きを明らかにしていきたい。

II. 『三ギニー』の概略および受容史について

『三ギニー』本文は、ある「教養ある男性」に宛てて書かれている。平和協会の会計係を務めているこの男性は、三年前、協会への加入・賛同の署名・寄付を作者に文書で依頼してきていたのだった。作者は返信の

遅延を詫びながらも、さらに解答を繰り延べにし、彼の問い「『あなたのご意見では、どうしたら我々は戦争を防げるのでしょうか』」の立て直しから手紙を始める。戦争は法律上も慣習上も男性領域なのだから、この問いは「私たちは、どうしたらあなたが戦争を防ぐのを手助けできるでしょう」になるはずである、と(TG,153,165;傍点引用者)。本文の三部構成のうち、第一部では女子大再建のための、第二部では女性の雇用援助団体運営のための寄付依頼書が紹介され、作者はくだんの男性を架空の対話者としながら、「私たち」すなわち「教養ある男性の娘たち」に可能な手助けについて、さまざまな提案をする。第三部に至って、作者は最初の男性の依頼に戻り、協会加入と署名については断り、寄付については無条件で応じる。これで三人の会計係にそれぞれ一ギニーずつ寄付を送ったことになる。この本文の後に「注と参照事項」が続き、三部それぞれに40前後の詳細な注解がつけられ、書簡体形式の本文を外側から説明する格好になっている。さらに本文の途中には五枚の写真がはさみこまれ、それぞれの位階に応じた衣裳をまとった男たちが写っている。以上が一応のテキストの概略である。

ヒトラーの演説に、反ファシズムと称して戦争を容認する英国の新聞記事に、ソポクレースの『アンティゴネー』に、『コリント人への手紙』に、そしてヴィクトリア朝の自伝・伝記に、不変の父権の構造を見つけ出し、内にいながらも同時に排除されている女の立場の二重性に抵抗の可能性を見出す積極的な実践主義は、今日に及ぶ射程をもっているといえる。⁹なるほど『三ギニー』は、…誰も好まなかった本である」とのエレイン・ショーウォルターのQ・D・リーヴィスに依拠した断定によって、テキストは誰にも読まれなかったし読む必要もないもの、という印象を持たされてしまったように見える。¹⁰ところが実際には、出版当時にはさまざまな反応が上がっていたのである。書評はウルフを「イギリスのパンフレット書き」「『三ギニー』は本のかたちの革命的爆弾」と評した。¹¹メイナード・ケインズは、「愚劣な議論であり、書き方もあまりよくない」と断言し、ウルフの小説のモデルでもあったヴィタ・サクヴィル＝ウェストによれば「誤解を招く議論」だったけれども、フェミニストたちからは熱烈な賛同の声が寄せられた。「私たちが渴望していたのはまさにこれだ」(フィリップ・ストレイチャー)「何かあればいつでも役に立つもの」(エレノア・セシル)。¹²ブレンダ・R・シルヴァーは、約60通を数える賛否両論の手紙を寄せた「一般読

者」たちとの文通から、ウルフがさらに持論を発展させていったことを跡づけている。¹³少なくとも当初において、『三ギニー』は読まれ、真剣な反応を引き出す力をもっていた。

しかしその後、フェミニズム思想への功績を見ようとしたベレニス・A・キャロルの論文が1978年に出るまで、『三ギニー』は論議の対象としては扱われてこなかった。¹⁴例えば伝記作家クエンティン・ベルは、「それは非常に奇妙な精神の、そして、思うに、非常に奇妙な精神状態の産物である」と要約する。¹⁵この奇妙なものは、80年、ペリー・マイゼルのポスト構造主義的視点によって、意味の戯れとして整理されるようになる。¹⁶この読みにフェミニズムの視点が重ね合わされた時、意味の戯れは、父権制のシミュレーションの結果と見なされるようになった。パミラ・L・カーフィーは「ウルフは『三ギニー』で駆使されるレトリックによって、単にコミットしていないと見せているのではなく、どんなひとつの立場にもコミットしないままとどまっているのであり、それによってウルフは複雑な圧政を研究し、回答の構造そのものを変えることができるようになっていく。」(傍点原文)と論じる。シャーリ・ベンストックはこの見方をさらに発展させ、「硬直し、偏狭で、利己的な父権的思考に対し、ウルフは曲がりくねった転覆的な議論を発展させ、男性的合理性や社会秩序という仮面にひそむ誤ったロジックを露わにして見せる」といっている。¹⁷

けれども父権制に掲げられた鏡『三ギニー』という図式は、テキストを一部分しか説明していないのではないだろうか。この曲がりくねったテキストは、父権制の法を利用しながらも、全く別の私的な法をつくり出しているのだから。

III. 私的な法としての〈どくろ〉

父権制の法と私的な法。『アンティゴネー』から引用されたこの二つの法は、互いに矛盾しあう性質を持つものではありながら、<ショール>と<どくろ>のレトリックを通じて呈示されると同時に、このレトリックのありようを定めるものともなっている。ひとまずこれらの法に焦点を合わせ、その際レトリックがどのように用いられるかを示したい。

第三部注42番は、一ページ半にわたるこれらの法の注解であり、ある不穏な予想で締めくくられている。

一つの性がもう一つの性を「支配」せねばならぬという古びた観念は、そのときすたれるばかりかひどくいとわしいものになるので、もし支配的権力が実用的な目的でなにかことを決定する必要があるれば、強制や支配というむかつく仕事は、ちょうど罪人の鞭打ちや死刑執行が現在覆面のものによって隠然と行われているように、劣等な秘密結社にゆだねられるであろう。しかしこれは予想である。(TG,411)

ここでまず気付くのは「支配」「強制」「劣等な」といったむきだしの言葉が、何かのヒエラルキーを想定しているということである。ウルフは、理想と掲げる性支配廃絶後の世界に、どんな「支配的権力」を予想していたのか。

注42番に対応する本文を参照すると、議論は終盤近いクライマックスを迎えていることが分かる。ヴィクトリア朝の娘たちの激情のこもった言葉がいくつも引用され、父親の「小児型固着」に逆らい、結婚以外の選択肢を求めて「理性的生活」を送ろうとする彼女たちの苦闘が浮き彫りにされる。「求めていたのは、アンティゴネーと同様、布令を破るのではなく掟を見つけることでした」(TG,359)。この言及を受けて、注42番はアンティゴネーへの注解を始めるのである。

「アンティゴネーによれば、書かれた法と書かれていない法という、二種類の法がある」(TG,410)として注42番は始まっている。ソポクレスの『アンティゴネー』をここで簡単に振り返っておけば、そこでは書かれた法とはやがては滅びる〈人間の布令〉であり、書かれていない法とは永遠の〈神の掟〉であった。王女アンティゴネーは後者の掟に従って死を選び、その結果、圧政者クレオンは家族に死なれ、国を滅ぼし、布令の可変性と掟の不変性を身をもって証明することになったのだ。注42番はこの二つの法を世代・性の視点から定義しなおす。第一に、書かれていない法とは、もはや永遠でも「父権的な起源」をもつ神の掟でもなく、「次世代が、主として自らの理性と想像力によって、新たに発見していかなねばならぬ」「私的な掟」となる。このとき、法の永続性は逆転しており、また両立しえなかった二つの法は、互いに関連づけられる。つまり、世代ごとに書き換えられる「私的な掟」が、「子供じみた固着性」をもった父権社会の布令の下で、「ある本能、激情、精神的・肉体的欲望を律する」世俗の掟となる(TG,410)。言い換えれば、書かれた〈布令〉を世代ごとに解釈してつくるのが書かれていない〈掟〉、となるだろ

う。⁴³⁾

次にウルフは、男女の肉体的差異を理由に掟の性差を主張する。「もし両性がそれぞれの立場でどんな掟が有効か確かめることができ、互いの掟を大切にでき、そのうえ互いの発見の結果を分かち合えたならば、両性はそれぞれの特性を捨てることなく、十分に成長し、質的にも向上するであろう」(TG,411)。そしてわたしたちは、先に引用した不気味な主張にたどりつく。男女間の支配/従属という関係が、互いの掟を尊重し合う横ならびの関係に変化したまさにそのとき、何かのいかかわしい権力が現れて、隠微な階層関係を形づくるわけである。

世代ごとに物事が刷新されていくという感覚、は、ウルフの読者にとって特に目新しいものではない。有名なモダニズム宣言『ベネット氏とブラウン夫人』(1924)では、ウルフは自らの文学革新について、エドワード王朝世代からの「私たちの」訣別という言い方をしていた。⁴⁴⁾また、体の差異に基づく性の差異というものがある、男女は違いを踏まえながらも協調すべきだという信念にしても、わたしたちにはなじみ深いものである。フェミニズム文学批評『私ひとりの部屋』(1929)では、ウルフは女の体に合った、「男の本より短く、凝縮した本」を提案しており、また最も論議を呼んできた両性具有の芸術家像の根底には、両性の協調に対する本能的な信頼の念がひそんでいた(RO,101,128)。つまり、42番の注は、途中まではこれまでのウルフと共通した主張を述べているのである。しかし不穏な結論部分はきわめて特異なものであり、例えばジェイン・マーカスの「社会主義者、平和主義者、フェミニスト」ウルフというレッテルには納まらない発言である。⁴⁵⁾

接続詞を多用した注42番は一見論理的でよどみがないのだが、途中でやや唐突に生じている概念が一つある。それは〈男の掟〉である。世代の観点から法を語る時、ウルフの〈掟〉は無前提に女のものである。ところが掟の性差を主張するに至って、男にも別の〈掟〉が存在するように書かれている。

掟の性差を論じた箇所を、もう一度詳しく見てみたい。ウルフはこう言って始める—「明らかに[男と女の違う体が]知覚し尊重する布令には違った解釈がなされるに違いない」(TG,410)。次に「従って」—と、ウルフは遺伝学者ジュリアン・ハクスリーから二つの論点を引用する。第一に染色体の数における性差が男女それぞれの特質を決定すること。第二に知能面での性差はそれでも存在しないと実証されていること。ウルフは前

者を根拠に後者の主張に異を唱え、知能の性差を断定する。つまり、ウルフはハクスリーの主張を、〈布令〉と〈男の掟〉に振り分けた上で、〈布令〉に対する違った解釈〈女の掟〉を対置させている。もともとなかったところに、自分の解釈によって、〈布令〉と〈男の掟〉とを隔てる一線を引いているのである。

ウルフは差異のある両性の平和な共存を提唱する。しかし、解釈の性差を認めるものと認めないものの平和な共存は本当に可能なのか。ウルフは「性差はない」とする〈男の掟〉をたった今登場させると同時に否定したばかりなのだから、その言うことと為すことは明らかに矛盾している。

この矛盾をふまえて次に続く不穏な予想—先の引用部分—を読み取るならば、そこで予想されていた「秘密結社」とは、当のウルフが密かな矛盾によって効力を発揮させようとしているレトリックのことについて自己言及しているように思える。すなわち、実用的な目的をもって性差を主張しようとする、男の立場にも変更を迫ることになり、その結果認めたくはない支配的権力がテキストに宿ってしまうのであり、テキストは性支配という権力をひどくいとわしく見せていたのに、今度は利用しているレトリックのせいで、自らもひどくいとわしい、支配的権力の命を受けた劣等な「秘密結社」を抱えこんでしまうのである。換言すれば、この〈どくろ〉がわたしたちに告げているのは、私的な法(〈女の掟〉)の条項であり、レトリックを駆使することに対する指針表明である。つまり、性差の主張もまた、父権制の言説あるいはファシズムの言説同様、一種の言語操作—この場合は『アンティゴネー』からの引用を言いさしておくこと、注で遅れて敷衍すること、そのときにはもとの『アンティゴネー』をすっかり換骨奪胎して〈男の掟〉を浮び上がらせること、他のテキストを読み換えて〈男の掟〉を名指すこと—等の操作により可能になるものだ、と告げているのである。

IV. 男の関心、女の無関心—読者としての〈どくろ〉

上で検討した私的な法は、本文においてどのように機能しているか。次に、〈どくろ〉と、それを取り囲む言葉の〈ショール〉とを、本文の第一部、第二部と順を追って見ていきたい。あらかじめ要約しておけば、ここでは言葉が得体の知れない大きな〈どくろ〉にぐるぐると巻きつけられていく。その過程で、それぞれの部でひとつずつ、小さな別の〈どくろ〉が露わにされると

いう仕組みになっている。

第一部冒頭、ウルフが返信の書き出しで最初に行うのは、受取人である男性を自分と同じ「教養ある階級」に設定し、似顔絵を描くことである。

まず最初に手紙の書き手が皆本能的に描くもの、手紙が送られる相手のスケッチを描いてみましょう。紙の向こうに暖かく息づく人がいなければ、手紙とは無駄なものです。そうすると、質問をなされたあなたは、生え際に少し白いものがあります。頭のてっぺんの髪の毛はもうふさふさはしていません。あなたは弁護士として少なからぬ努力をして中年におなりです。でも全体として見ればあなたの旅路は順調でした。(TG,153-154)

アレックス・ズワードリングは、フェミニズム色の明確なこの本を男性読者が途中で投げ出さないための周到な計算として、ウルフがこの「善意の」男性像—「フェミニズムに共感を寄せている、困惑しているが偏見のない、安定した男性」—を考案したと述べている。⁽⁴⁾しかしズワードリングの考え方は逆向きではないだろうか。実のところは、明確な主張を公言するために便宜上の受取人が揺るぎなく設定されているのではない。「暖かく息づく」人間との仮想の対話を通し、主張はこれから形づくられていくのである。つまり、『三ギニー』本文において、簡単に悪意を閃めかせるかもしれない他者との生きた対話という状況とウルフの述べる見解とは、切っても切れない関係にある。例えばテキストにつけられた写真の制服の男たちと手紙の受取人とは、実は何ら違わないかもしれない。ここで描き出されている「善意」をこれから先も損なわないことは、いわばウルフの筆一本にかかっているのである。

相手の「善意」を計算しながら相手の批判にまで及ぶ意見を述べること、この困難な課題に取り組むために、『三ギニー』の〈ショール〉と〈どくろ〉のレトリックは要請されている。このレトリックは上の引用部分の直後に現れ、ウルフは続けて同じ「教養ある階級」の男女が教育機会と富の分配に関して、全く異なる状況にあることを示そうとしながら、言葉を中断する。確かに「たいした困難もなく政治と人々、戦争と平和、蛮習と文明についての話はできます」(TG,154-55)。「でも」—。

でも…この三つの点は断崖のしるしなのです。この

深淵はたいそう深く刻まれているので三年以上も私はこちら側でそちらに話し掛けてみるのが何か役に立つのかと自問していたのです。ならば他の誰か—メアリー・キングスリー—to頼んで私たちの代わりに話してもらいましょう。(TG,155;省略は原文による)

ウルフは「断崖」をしるす「…」によって、自分の取り組む性的差異の課題を口にする難しさをほのめかしている。本論Vで詳しく述べるが、ここに『三ギニー』本文を取りまとめる大きな「どくろ」がひそんでいる。レイチェル・ボウルビーの指摘によれば、ウルフの省略記号とは、省かれてしまうものかを際立たせている。¹⁰⁾ ウルフはここでラムジー夫人の「ジョール」のような柔軟さを備えた言葉を少しほどいて、その奥の「どくろ」の存在をわたしたちに知らせているのである。さらにこの省略記号は、「どくろ」が何かこの場にそぐわないものだと示すことで、無理なく十九世紀の旅行家メアリー・キングスリーを自分の文脈に呼び込んでいる。

キングスリーは『「今まで申し上げたことがあるか分かりませんが、ドイツ語の学習を許されたことが、私のこれまで受けたお金のかかった教育のすべてなのです』』と続け、「教養ある男性の娘たち」の苦境を代弁する(TG,155;傍点原文)。ここでわざとウルフは同時代人ではなく、十九世紀の女性—母の世代の女性—を選んでいる。この選択は、いま一つの「どくろ」に向けての第一歩である。というのも、『三ギニー』は階級内の世代・性を表すのに家族の用語を使用する。その用語によれば、ヴィクトリア朝の女たちもウルフも、「教養ある男性の娘」として記述される。この独特な用語を設けた理由は、脚注で説明される。

我々のイデオロギーはまだなお根深く人間中心的なので、このぎこちない用語—教養ある男性の娘—を、父親がパブリック・スクールと大学で教育を受けた階級について述べるのに必要とした。もし「ブルジョワ」という用語が彼女の兄弟に適したものだとしても、ブルジョワジーの二大特徴—資本と環境—において根底から異なっているものにこれを用いるのは、きわめて明白に不当である。(TG,369)

イデオロギーが女を父の従属物「父の娘」と記述するよう要請するのであれば、父とその息子とに同じ特徴を与えるのであれば、それは「人間中心的」であると同

時に不変に「父権的」でもある。このイデオロギーに従うと「教養ある階級」は「教養ある男性」と「教養ある男性の娘」とに二分される。基本的家族構成のうち、この二分法が曖昧にするのは、「兄弟」「母」の存在である。戦争の根源的理由を父権制に見るウルフからすれば、父権制解体には「父」に対抗する「娘」「兄弟」「母」の結束がぜひとも必要なことになり、具体的には「教養ある男性の娘」の名の下の「娘」と「母」の結びつきを最大限に利用すること、「教養ある男性」に含まれる「父」と「兄弟」とを分けること、この二点が方策として導かれる。本文全体を結ぶ大きな「どくろ」とは、手紙の差出人の批判にまで及びかねない後者の方策と関連している。これは父権制の「布令」と「男の掟」の分断を試みた第三部注42番とも関わることであり、第三部の焦点となる。第一部・第二部においては、ウルフはまず前者の方策に着手するのである。

ウルフは「教養ある男性の娘」が戦争を防ぐ役に立つ分野として、女性の教育と職業とを選ぶ。このため第一部では女子大再建のための、第二部では女性の雇用援助団体運営のための寄付依頼書が紹介され、彼女は寄付金と交換に、会計係たちに自分の要求を呑ませようと目論むわけである。くだんの男性との仮定上の対話の中で要求が考案されるのだが、返事はどちらも頼りない女性たちに対する厳しい詰問調で始まり、無理な提案を連ね、「…」と行き詰まってしまう。以下の二つの引用は、二通の手紙がそれぞれ中断された直後の部分である。

[第一部]手紙はそこで打ち切られました。言うことがなかったからではありません—実際結びの文句は始まったばかりだったのです。手紙の向こうの顔が—手紙の書き手がいつも目にする顔ですが—さっき引用した本の一節をなにか憂鬱そうに見つめている様子だったのです。(TG,201)

[第二部]そこで手紙は止まってしまったのです—というのは手紙の向こう側の顔に—手紙の書き手がいつも目にする顔ですが—退屈な表情なのかしら、疲れた表情なのかしら。その無給会計係の視線は小さな紙切れの上にとどまっているようでした。紙切れの上には細かな退屈な事実が二つ書いてありましたが、私たちが論じている問題、自分でお金を稼いでいる教養ある男性の娘たちがどうしたら戦争を防げるか、という問題と関係があるので、ここに写して

おきましょう。(TG,215)

「ショール」と「どくろ」のレトリックが、ここで形を変えて繰り返されている。先程の場合「…」の背後の大きな「どくろ」は、その存在をほめかされるにとどまっていた。ところがここでは中断の理由—「手紙の向こうの顔」—は直後に明示される。すなわち、この会計係たちの表情が、第一部・第二部の「どくろ」にあたる。くだんの男性の似顔が「どくろ」へ至る言葉の発信源だったのに対し、会計係の似顔はウルフの投げかける要求の行く手に現れて言葉をさえぎり、彼女が男性との対話から編み出してきた「ショール」を無効にしてしまう。活喩法 (prosopopeia) が想像上の人物を現存の人のように行動させる修辭ならば、男性の似顔絵はこの修辭の忠実な実践であるのに対し、女性たちの似顔絵はある意味で逆さまの実践である—会計係たちはウルフの突きつける要求に硬直してみせる限りにおいて、生命を与えられているのだから。

迂言法はここでも他者と呼び込む。自分が「どくろ」の上に積み重ねたはずの「ショール」が役立たずなのに苛立つウルフは、第一部で会計係に放火をそそのかす。

だからこのギニー金貨は「ぼろ切れ。ガソリン。マッチ。」と指定されねばなりません。そして以下の通告を添えねばなりません。「このギニー金貨を取って大学を焼き尽くしてしまいなさい。これまでの偽善に火を放ちなさい。燃える建物の明かりで夜鳴鳥を脅かし柳を紅に染めなさい。そして教養ある男性の娘たちを火を囲んで踊らせてひとかかえの落葉を次々に炎の上に積ませなさい。そして彼女らの母親たちに上の窓から身を乗り出させて叫ばせなさい、『燃えよ!燃えよ!こんな「教育」はたくさんだ。』」(TG,202-3;傍点引用者)

ウルフは続ける、この教唆は「空疎なレトリック」ではない、なぜなら女子教育は女性の手で、と実際の援助を手控える某学部長の提案に従ったまでだから、と。確かに上のレトリックは「空疎」とはいえない—ただしその内容のせいではなく。重要なのは、学部長の提案に乗じ、あるいは現実的要求を会計係に提示できないというウルフの内的動機に乗じ、「母親たち」が言語の課してくる沈黙を破って叫び、蘇っていることである。この「通告」は書かれたその場で放棄され、すぐ後には要求をつけずに一ギニー贈ろうという最も現実

的な決断が続く。つまり、ノンセンスであることを誰もが疑わないような言説の中で、父権制解体そのものである、「娘」と「母」との結末が謳われている。明らかなノンセンスならば、非現実的との誘いを受けることもなく、活喩法を女性に対してもまっとうに使用できるというわけである。「娘」は踊り、「母」は叫ぶ。¹⁴⁾

第二部に入ると、子供の遊び歌がもじって歌われる。「クワの木のみまわりを回ろう、回ろう、回ろう。みんなおくれ、おくれ、おくれ。三億ポンドは軍事費になった」(TG,238;他に249,261,270)。クワの木をめぐる悪循環は、父権制の限らない所有欲のメタファーとなっており、第二部の始めで、ウルフはこの悪循環を断ち切るために、ぜひとも今度の会計係には要求をつけようと決意する。ところが先に見たように、手紙は再び挫折する。このため、第二部は第一部の単なる繰り返しのようにも見える。繰り返される替え歌は、内容どおりの悪循環をテキストもまた反復しているのだと、結局のところウルフも父権制から逃れられないのだと、強調しているようにも一見読める。なるほど本論Ⅲで見たように、父権制からの逸脱によって生じる新たな「支配的権力」に対するある種のいとわしさを、ウルフは父権制の悪循環の模倣を通して告げているのだ、と考えることはできそうである。しかしさらに踏みこんで読んでみると、類似表現の使用といった大げさな反復の身振りの陰には、反復していないものが密かに示されている。例えば第一部同様の言い回しを選んだ「通告」を見ると—

「このギニー金貨を取って、建物を焼き尽くすためではなく、その窓を輝かすために使いなさい。そして教養のない女性の娘たちをその新しくて貧しい、バスが通行人商人が商品を売り歩く狭い街路沿いに立つ建物を囲んで踊らせなさい、そして『戦争はたくさんだ!専制はたくさんだ!』と歌わせなさい。すると母親たちは墓の中から笑い出してきた言うだろう、『私たちが汚名や軽蔑に耐えたのはこのためだった!娘たちよ、新しい建物の窓を照らし出さなさい!輝かせなさい!』」(TG,275;傍点引用者)

同じ「娘たち」の踊り、「母たち」の蘇り。同じノンセンスとして見過ごされそうなこの通告には、決定的な変更が二つ加えられている。一つは用語の変更—「教養ある男性の娘たち」(“the daughters of educated men”)が「教養のない女性の娘たち」(“the daughters of uneducated women”)

に変えられていること。もう一つはこの通告が、実際に宛先に向けて発送されること。つまり、一見不毛な反復を示すかに見える二つの通告は、〈母〉と〈娘〉の結末の明らかな進展を報じている。

この進展は、上の通告に至る第二部の議論の成果を跡づけるものである。会計係の拒絶によって自分の要求の訂正を迫られたウルフは、もう一度手紙を書き直す。重要なことに、この書き上げられる手紙がこれまでの放棄された手紙と異なるのは、父権社会の中で何をするかではなく、いかにするか、を説いていることである。例えば第一部の手紙では、伝統より実験をむねとし、「人を支配する技術」ではなく「人の暮らしや心を理解する技術」を伝える、私心なく学問を愛するもののオープンな女子大建設が主張されていた(TG,199-201)。第二部前半では、女性運動は平和運動に向かうべきだというH・G・ウェルズらの提案が、皮肉な調子で紹介されており、こうした理想主義が手紙を途中で止らせていたのである。ところが、完成する手紙の中で述べられているのは、いかにするか—正確に言えば、いかに読み取るかである。

『伝記には多くの面がある。伝記は訊かれた問いに単純な一つの答を返すことはない』(TG,268)。第一部で、ウルフはヴィクトリア朝のある女性の単調な家庭生活を描写した—「日々が過ぎていった。土曜日になった。…次の日は日曜だった」(TG,205)。第二部でウルフは伝記に再び戻り、ファシズムの家庭礼賛の言説に陥らないよう細心の注意を払いつつ、母たちの生活に価値を見出そうとする。⁹⁹『「なぜなら、もし教育を受けていなかったにせよ(“if not educated”),彼女たちがそれでも洗練された(“civilized”)女たちであったことは否定できないから』(TG,269)。例えば、とウルフは冒頭のメアリー・キングスリーを解釈しなおして手本を示す、彼女が「お金のかかった教育」(“the paid-for education”)の欠乏を嘆くとき、実は「お金のかからない教育」(“an unpaid-for education”)を受けたとも言っていたのだ、と(TG,266)。そしてウルフは「貧困、貞節、嘲笑、偽りの忠誠心から自由であること」を〈女の掟〉の条項として提示してみせる。掟づくりの実践によりウルフが読者に薦めているのは、伝記の「行間」にある、「母国語=母の舌」(“mother tongue in biography”)を見つけることである(TG,255,265)。¹⁰⁰

この読みの指南書は、ギニーと共に会計係に送られる。送付の行為の表明によって、現実の相の下ではじめて、活喩法が〈娘〉に対してまっとうに—生氣を奪

う修辞としてではなく踊らせる修辞として一使われることになる。ポール・ド・マンは自伝をどのテキストでも可能な読みの形態と定義するとき、活喩法を自伝特有の修辞とした。「活喩法とは自伝の修辞であって、この修辞によって…名前は顔のように分かりやすく、憶えやすいものになる。」¹⁰¹ならば作者が読者の顔に望ましい表情を見出すとき、作者は読者に読者自らの自伝としてテキストを読ませ得た、と判断することになるだろう。作者が第二章で成し得たと判断しているのは、伝記を自伝へ転換するような読み方の伝授なのである。

手紙の読者たる会計係たちは、男性との対話を通してウルフが送る手紙に憂鬱な表情を見せたとき、手紙を自分の自伝として読むことを拒んでいたといえる。彼女たちの表情は、単なる無気力の表れではなく、男性に認可された言説が提示する女性の〈顔〉への果敢な挑戦であった。

これは「紙の向こうに暖かく息づく人がいなければ」—言い換えれば、受け取ってもらえる顔を提示できなければ、すなわち自伝的な読みを誘わなければ—「手紙とは無駄なもの」というテーゼをもつウルフにとって、まさしく手紙を無駄にする致命的な反応であった。そこで第一部では、ウルフは手紙の撤回と引き換えに、単なるノンセンスとして、叫ぶ〈母〉と踊る〈娘〉の姿とを滑り込ませておいた。第二部に至ると、同じ撤回の身振りを模倣するかに見えて、ウルフ自らが伝記の自伝的な読者となり、ヴィクトリア朝の伝記の余白から「母の舌」を取り出して、記録の裏を語らせた。このとき、手紙は送付可能なもの、自伝として読まれ得るものになる。

ウルフが伝記の自伝的読者となるとき、例えばメアリー・キングスリーは「お金のかからない教育」を受けたと暗に語っていたのだとウルフが主張するとき、語っている〈舌〉は誰のものなのか。くだんの男性や会計係たちの示す反応が何であれ、当然皆ウルフの想像の産物なのだから、ウルフが何を捨て何を送ったかは、当のウルフが何を自伝的と判断したか、を物語るはずである。示唆的なことに、ウルフが送ったのは〈舌〉であって、顔ではない。〈舌〉は〈顔〉ほど分かりやすくも、憶えやすくもない。ウルフが自伝的可能性を見出したのは、〈母〉のものとも〈娘〉のものともつかない、分かりにくく憶えにくい、その分自由で可変的な〈舌〉であったといえよう。こうして、〈舌〉が共有されるとき、踊る〈娘たち〉と叫ぶ〈母たち〉は、歌い踊る〈娘たち〉と笑う〈母たち〉になる。自称「反ファシズムのプロパガ

ング」たる『三ギニー』にふさわしく、〈母〉の声は、娘に伝播(propagate)している(TG,395)。

読みの技術を介することにより、娘に継承され得る母親像が造型された。二枚のギニー金貨を贈り終えて、クレオンの布令から兄の屍を取り戻したアンティゴネーよろしく、いざ父権制解体その二へと、父の法の下に縛られた兄弟たちの奪回へと、ウルフは議論を進める、かに見える。

V. 〈どくろ〉—読者に転位する作者

第一部・第二部の手紙はどれも、反戦に協力せよとの要求の手紙として始められていた—「私たちのギニー金貨が平和のために使われるのだと納得させてくれない限り、彼女にはこの金貨を上げられません」(TG,238)。最後の完結した手紙について、発送した、とウルフはくだんの男性に報告する。「これが最終的に女性の雇用援助団体運営の無給会計係に送った手紙でした。以上のものが彼女がギニー金貨を手にするための条件です」(TG,276)。しかしこの送り主はひとつ重大なミスをしている。本来なら条件を了承するか否か確認を取ってから金貨を渡すべきところを、手紙にうっかり金貨を同封してしまう。このミスによって、封書をいかように扱おうとも、会計係の判断に委ねられることになる。一ギニーは条件を呑ませる効力を持たず、換算してただの21シリング(約一ポンド)にすぎない。

OEDによれば、ギニー金貨とは特定の場合—専門職への謝礼、公共団体への寄付、芸術品・競走馬・地所の値段表示等—にのみ使われるものであった。ベンストックはいう、「ギニー金貨は特権・贅沢・良家の出自を表し、ウルフの要求を支える、影響力とは金次第という中心的『事実』を繰り返し告げる。」²²ギニーの本来重要な点は換算価値よりその付加価値、影響力である。しかもこの付加価値とは、十三世紀から豊かな教育を受けてギニーの報酬を得てきた〈教養ある男性〉と、1919年にはじめて「六ペンス銅貨」を稼いだ〈教養ある男性の娘〉との格差の上に生まれるものであり、換算価値より遅れて生まれる価値である。

父権制の〈布令〉の影響力が金次第だとしたら、一方のウルフの〈女の掟〉の〈教養ある男性の娘〉の影響力は、経済的自立に支えられた「公平な影響力」である(TG,174)。この〈女の掟〉を伝播すべくウルフが実践したのは、〈布令〉に従い影響力をギニーで売りつける構えを示しておいて、別の影響力をギニーと共に一緒に送

ってしまうことであった。言い換えれば、ギニーに別の付加価値—〈舌〉—を並べてしまうことであった。こうすれば、ギニーは21シリングに、〈舌〉は強制力を伴わない匿名の声になる。

「公平な影響力」はまた、第三部にも〈舌〉を送り返す。「するとあなたの手紙です」との第三部の書き出しは、当然最初の会計係にウルフの関心が戻るものと予想させるが(TG,277)、「でも」と、彼女は、まだ話し掛けるべき女性たちが残っていたことに気付く。

でもお金のかかった教育はまだ始まったばかりで粗削りですし、オックスフォードやケンブリッジでそんな教育を受けられるものもまだ非常に限られていますから、大多数の教養ある男性の娘たちの文化はまだその聖なる門の外で、扉の鍵がなにか説明のつかない手ばかりで外れていた公共図書館や個人の書齋から得られるものに違いありません。その文化はまだ1938年には、主として私たち自身の言葉(“tongue”)の読み書きにあるに違いありません。(TG,283;傍点引用者)

ウルフは自分も書齋に忍び込み、くだんの男性の手紙にあるように「文化と知的自由を守る」べく本棚の前の娘たちを説得しよう、〈舌〉を送り届けようと試みるのである。

注目すべきことに、この「大多数の」娘たちに話し掛けようとしつつも、「文化と知的自由を守る」適任者を求めるウルフは、相手を次第に狭めていく。「文筆業」一般から、「私たちは主にお金をかけない文化を持つもの、その文化が自分たち自身の言葉(“tongue”)の読み書き能力にあるものに呼びかけているのです」「そういうわけで、私たちは十分に食べていける教養ある男性の娘に対してのみ呼びかけねばならないということが明らかになります」「ならば始めに、想像の世界からだけでも、十分に食べていけて自分の楽しみのためだけに読み書きをしていられるような、教養ある男性の娘をだれか呼び出してみましょう」(TG,284,285-86,288,292)。そしてやっとうルフは机に新聞を広げる「だれか」(“some daughter of an educated man”)にたどり着き、説得を始める。この求心的な動きは、第一部・第二部の、繰り出された言葉が会計係たちの暗い表情で挫折するプロセスを思い出させる。

「だれか」とは誰か。この説得の様子は六ページほどにわたって収録されるが、引用符が乱れており、途中

には回答を待たされている男性に相談する箇所もある。始まりは—『『ごらんなさい』、こう始めるとしましょう、『机には新聞があります。どうして、とこう訊いてみましょくか、日刊紙を三つ、週刊誌を三つも取るのですか』『だって』彼女は答えます、『私は政治に関心があって、事実を知りたいからです』...』(TG,293)。この会話は何だろう。新聞記事を突き合わせて事実を導いてきたのは、これまでの『三ギニー』のしてきたことではなかったか。だとしたらウルフの話し掛けている相手の声とは、やはりウルフ自身の声であるらしい。彼女が「想像の世界から...呼び出してみましょく」と何食わぬ顔で呼び出したのは、レトリックを駆使して『三ギニー』を綴ってきた作者ウルフ自身だったのである。

「マダム」と呼びかけられるこのウルフ自身は、もう一人のウルフとの会話を通して、新聞の「汚れた」記事から真実を見極めようとしてきたと語る。もう一人のウルフは言う、「もしも執筆の唯一の目的が政治の真実を語り、芸術の真実を語ることだという人々が新聞を書いたなら、私たちは戦争の価値を認めるのではなく、芸術の価値を認めるでしょうに」(TG,295-96)。「芸術の価値」を読者に喧伝するプロパガンダは説得力に欠けるものである。しかし違う文脈に埋め込まれた二つの自己が会って、一方が「芸術の価値」を謳い、一方が「頭脳の汚れ」を見定め、互いの声の中に自己像を読み取るのならば、そして重なり合う二つの異なる声の共振が読者のもとにも及ぶのならば、読者もまたこの顔のないテキストを自伝的に読み取ろうと、目を凝らすのではないか(TG,296)。「文化に個人的な魅力や広告を混ぜることは文化で身売りをすること」と言って自己語りを露悪趣味と見なし、プロパガンダを「安っぽいその場限りの仕事」と見なすウルフにとって、<舌>の分裂はそのどちらともつかない新たな形式を可能にしたのである(TG,298,395)。

ウルフは「マダム」に向かってなら、ファシズムの権威的言説に近づく恐れもなく、「頭脳の姦淫」を回避するための具体的方策の提示が可能である。例えば、自費出版をすること、一般読者を最上の批評家と見なすこと。こうした薦めは明らかにわたしたちに夫レナードと経営したホガース・プレス社のことや、エッセイ集『一般読者』といったウルフの伝記的事実を思わせる。<ショール>と<どくろ>のレトリックはこれまでも他者を呼び込んで来たけれども、ここでの<どくろ>たる作者を救おうとしているのは、テキストの外部にある一

読者ヴァージニア・ウルフであると言えよう。

この読者ウルフは最後に作者ウルフを激励して遠ざかっていく。『『文化と知的自由を支持するこの声明書に、単に署名するだけではいけません。少なくとも約束を実行しようとしてみなさい』』(TG,299)。今こそ当初の男性の眼差しの下で<ショール>をほだき、包み込まれた大きな<どくろ>を露わにする時である。父権制解体その二—<教養ある男性>に含まれる<父>と<兄弟>とを分けること。金貨を無条件で贈ることを決めた後、この類まれな祝祭の機会に、ウルフは不用になった古語—フェミニスト—を焼こうと言い出す。⁶⁹「ごらんなさい、何と燃えることか。何という炎が世界に舞い踊ることか」—第一部・第二部で目論まれた放火と<娘>の乱舞は、ここで「フェミニスト」に対する従来含意を焼き尽くす「炎」の乱舞として実現する(TG,302)。「以前よりも澄み渡った空気の中に私たちは何を見ましょう。同じ目的に向け共に進む男と女」(TG,303)。単語を儀式的に焼くことで、ウルフは一挙に<母>の世代と「私たち」の世代との連帯を可能にする。

ところが彼の協会の一員となることを検討するにあたって、当初からの問題が再浮上する。

表面上は、なんと簡単で、なんと単純なことでしょう—でもその奥底では、なんと難しく、なんと複雑な...—一体どんな疑念、一体どんなためらいをこの点々は意味しているのでしょうか。[...]それは理性でも感情でもなく、そのどちらよりも深くて根本的なことなのかもしれません。それは違いなのでしょうか。事実が示してきたように、私たちは性も教育も違うのです。(TG,305)

ここでの省略記号は本論IVの初めに触れておいたものと同様に、性的差異という大きな<どくろ>を指し示している。ウルフは<どくろ>の在りかを知らせておきながら、私たちは違うから違う、とここでも同語反復を言いつのる。その一方で—「どうしてこうなのか説明するのは易いことではないのです。—ギニーの贈り物によって恐れも媚びもせず自由に話せるようになったのだとしても(そう私たちは誇りましたが)」(TG,306)。実のところ、ここでせめぎ合っているのは、<どくろ>を<ショール>に隠しておきたい「恐れ」と、<ショール>をといて<どくろ>を白日の下に晒して見せてやりたいと願う、相手への「媚び」であるようだ。

二つの気持ちの間の振幅によって編まれていく<ショー

ルは、相手の男性の平和協会の外部に「アウトサイダーの会」を作者につくらせ、「家事労働に賃金を」という第二波フェミニズムの争点を先取りさせたかと思うと断念させる。⁶⁹ IIIで見た第三部42番の「どくろ」が予想していたように、この性差別廃絶後の言説において、「ショール」はまるで「罪人の鞭打ち」のように書き手を引き絞り、「ことを決定」せよと迫る。

「秘密は欠かせません」(TG,330)。そう言い張るウルフは、やがてぼつりと漏らす—「誇ったのは少し大きかったようです。何か恐れが、何か戦争を予言する祖先の記憶が、いまだに残っているようです」(TG,331)。ではその「祖先の記憶」とは何か、「ショール」はもはや作者の手を離れたかのように、明言を求めてやまない。「私たちには[恐れによる沈黙を]説明する勇気もわざありませんから、私たちの間に聖パウロのヴェールを降ろしましょう、つまり、解釈者の後ろに避難しましょう」(TG,331)。ウルフは礼拝時に女性はヴェールをつけるべしと説いた聖パウロに従い、ずっと奥に隠れてしまい、代わりにわたしたちに『女性の聖職』という報告書を読ませる。報告書は聖職における女性の疎外の歴史的・心理的起源を明らかにする。

歴史的起源を三世紀か四世紀、聖職が予言者の役割に取って代わったときとして、心理的起源を女性が認められると聞くと聖職者たちに生じる強い「小児型固着」とする報告書の言を引いて、ウルフはこの事実はひとりひとりの「娘」が「自分の経験」から検証できるものだと言い出す。「解釈者たちは任務を果たしてくれましたから、今こそ聖パウロのヴェールを引き下げ、顔を合わせて、恐れと恐れを起こす怒りの分析を大雑把で不器用でも試みる時です」(TG,342)。ヴェールを下げ、「ショール」を外し、隠れていたウルフは「顔」を見せ、何か「自分の経験」を語り出しそうである。その期待に応えるかのように、ウルフは第一部冒頭の省略—「断崖」—を埋めていく。

ならば、政治と人々、戦争と平和、蛮習と文明についてのあの男女の私的な会話のさなかに、例えば、教養ある男性の娘が牧師や株式取引所や外交の仕事につくことを認めたらという思いが生じたのでしょうか。思いはただぼんやりと形をとるのみなのですが—でもテーブルのこちら側ではすぐに私たちの内部の警報ベルが鳴ってあなたの側で「意識レベルの下動機から生じる」「強い感情」に気付きます—それは混乱しているけれどけたたましい音で—おまえには

させない、させない、させない…(TG,344);

おそらくウルフは30年代の告白文学隆盛のコンテキストに身を置いて語っている。⁶⁹ 先に触れたように、自己語りとはウルフにとって露悪趣味に等しい。「あなたの私的な顔、もしくはあなたの私生活の詳細を出版させてはいけません」(TG,291)。ウルフはわざと自分で定めた禁を犯す素振りを見せ、読者に、または対話中の男性に私的な顔をちらつかせる。テキストの冒頭から引き伸ばされてきた「どくろ」はもうすぐ正体を現すかに見える。

さらなる告白を期待する読者はしかし、自らの覗き見る眼差しの前にぬっと差し出されてくる鏡に、たじろぐことになる—「でも私たちはテーブルの向こう側の—あなたの側の—どんな感情分析を試みられるでしょうか」(TG,344)。

テーブルのあなたの側で痼癪を起こすのは、どんな強大な意識下の動機なのでしょう。野牛を殺した蛮人がもう一方の蛮人に力量を褒めてくれと言っているのかしら。なにかの専門家が疲れて同情を求め、ライバルに憤っているのかしら。家父長がセイレーンを求めているのかしら。支配にはどうしても服従が要るのかしら。そして、私たちの沈黙が覆い隠す思いのうち最もしつこくて難しいもの、支配とは一体どんな満足を支配者に与えられるのかしら。(TG,344; 傍点引用者)

読者と対話中の男性が「あなた」と重ね合わされて、「どくろ」はここで思いがけない姿を現わす—「支配とは一体どんな満足を支配者に与えられるのかしら。」フロイトの「女は何を望むのか」に対する応答ともとれるこの問いは、「どくろ」を覗き込もうとしたもの全般に投げ返され、「ショール」の中に一人の「女」を見ようとする視線は、分裂する欲望を見るものの中に数え上げる言葉によって、はじき返されてしまう。すなわち、ウルフが自分の姿の代わりに「どくろ」に仕掛けておいたのは、いかなる性の本質規定も拒み、「支配」と「支配者」とを切り離すことによって、性的差異を非「人間中心的」に編成しなおそうというメッセージだったといえる。⁶⁹

というのも、テキストの結末部分において、「男女の私的な会話」はヴィクトリア朝へと廻り、「父」に「母」に「幼児型固着」の起源をたどる。ウルフの読みによ

れば、〈父〉も〈母〉も幼児型固着に支配されている。娘に対する独占欲として発揮される〈父〉の固着は自然・法・財産の保護を受けるために強力である。一方、〈父〉の欲望に従う〈母〉たちもまた、報酬を卑しいと感じる「レディらしさ」や父の犠牲を厭わない「女らしさ」という名の幼児型固着に冒されている。しかし、〈父〉の欲望を拒むこともできる。この〈父〉の固着への抵抗から自分の内なる固着に気付く〈母〉たちを、ウルフは「布令を破るのではなく、掟を見つけようとする」アンティゴネーになぞらえたのである。ウルフは読み取ってきたこの〈母〉たちの幼児型固着との関係をそのまま現在に適用し、専制者の姿に自分たちを見る。「私たちは無抵抗の服従を運命づけられた受け身の観客ではなく、私たちの考えや行動であの姿を変えられるのです」(TG,365)。これが作者の立場の最終表明だとすれば、〈女の掟〉は本論 III でみたような〈布令〉に対する戦略を定めるばかりではなく、〈布令〉と〈女の掟〉との不安定な関係を「私たち」の主体の内に呼び込み続けようとする、もう一つの規定を持ったことになろう。

「私たちは違っているのだから、私たちの援助も違ったものでなくてはなりません」(TG,366)。送られてきた用紙に署名をしないまま、ウルフは三枚目の金貨を贈る。〈男の掟〉を書き込むべき空白を同封して。

VI. 結び—自伝としての『三ギニー』

『三ギニー』出版のほぼ一年後、ウルフは「過去のスケッチ」を書いている。ここには『燈台へ』のショールとどくろのエピソードの原体験が描かれている。

私は壁の上でちらちらするあの小さな炎が怖かった—でもエイドリアンは好きだった—そして妥協するために、婆やは炉格子の上にタオルを折り重ねた—それでも私は目を開けずにはいられず、するとそこにはしばしばちらちらする炎があった—私は幾度もそれを見て、寝つけなかった—(MB,78)⁽⁹⁾

五十七歳のウルフは、回想の中で次のようなエピソードを続けている。

これらは幼い頃の恐怖だった—というのは、後に[兄の]トウビーが学校に行ってしまう、彼の猿のジャッコを[姉の]ネッサがベッドへ持って入るようゆだねて行ったとき、ドアが閉まるとすぐ私たちはおはな

しを始めた。(MB,78-79; 傍点引用者)

おはなしの力によって、炎の恐怖は克服されうるものとなる。『燈台へ』及び『三ギニー』とは、このおはなしの力の具体化である。とくに後者ではこの力をフェミニズム理論形成のため、前者での物語上の事件までもレトリックとして吸収しているといえる。ショジャーナ・フェルマンは、『おはなしがない』...という女性ならではの苦しい立場は、読むことの絆を通じて、女性によるおはなしの共有・交換を通じて、初めて本当に理解されるだろうし、おそらくは癒されもするだろう」と語る。⁽¹⁰⁾『三ギニー』を見る限り、ウルフにとっての女のおはなしとは、積み重なった言葉の向こうに他者の顔が用意されていて、読者が女であれ男であれおはなしの中に誘い込まれてしまうような「読むことの絆」を備えたものであった。

『三ギニー』出版前の不安を、ウルフは日記に書き残している。「あの巨大な圧力を解放するためにあれほど烈しい感情をもって書いた本でも、表面にさざなみさえ立てないだろう。それが私の怖れるところだ。それからまたみんなの前で、こうした役目を演ずることが不安なのだ—自伝をさらすのが怖い。」⁽¹¹⁾『三ギニー』自体が一つの女のおはなしでありながら作者の「自伝」ともなっているのは、作者ヴァージニア・ウルフまでも一読者として対象化されているからである。この自伝にただ一人のモデルを求めてみても多元的な言葉の渦が見えてくるばかりであり、渦の向こうには渦を見る読者への問いかけるものが据えられているばかりである。わたしたちがこのテキストを受け取ることができるのは、わたしたち自らの自伝として読み取ろうとする時のみであろう。

注

- (1) Virginia Woolf, *To the Lighthouse* (Oxford: World's Classics, 1992). このテキストからの引用は、TLとしてページ番号を本文中にカッコで示す。伊吹知勢訳『燈台へ』(みすず書房、1976)参照。
- (2) Woolf, *A Room of One's Own/ Three Guineas* (Oxford: World's Classics, 1992). このテキストからの引用は、それぞれ RO, TGとしてページ番号を本文中にカッコで示す。
- (3) ナオミ・ブラックは参政権運動を中心とし 1920

- 年頃に頂点を迎えた第一波フェミニズムと、1960年代から始まった第二波フェミニズムとの、橋渡しとしてウルフをとらえる。ブラックによれば、ウルフは当時のフェミニズムの中心命題—「性差の強調・男性支配が社会生活を歪めるとの信念・女性が社会生活に及ぼす影響への期待・特定の改革を運動が支持する大切さ・育み養う女性が平和の担い手であるという考え」を明確に表現し、一方で現代的な関心—「父権的家族への反対・吸収同化に対する警戒・性の問題・法の上での平等実現の後も、女性運動は女性を支え続けようという思い」—をも示していた。Naomi Black, "Virginia Woolf and the Women's Movement," in *Virginia Woolf: A Feminist Slant*, ed. Jane Marcus (Lincoln: Nebraska Press, 1983), p.194.
- (4) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelist from Brontë to Lessing* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1977), p.294; Q.D. Leavis, "Caterpillars of the Commonwealth, Unite!" *Scrutiny* 7, no.2 (September 1938), rpt. in *Virginia Woolf: The Critical Heritage*, eds. Robin and Allen McLaurin (London: Routledge and Kegan Paul, 1975), pp.409-19. ショーウォルターはリーヴィスの「ウルフ夫人の近刊での努力は、私たち女性にとり期待外れである」(410ページ)とする意見にアナクロニスティックな共感を寄せている。
- (5) An unsigned review in *Times Literary Supplement* (4 June 1938); Theodora Bosanquet, a review in *Time and Tide* (4 June 1938), rpt. in *The Critical Heritage*, p.400, 402.
- (6) ストレイチー、セシル、サックヴィル=ウェストの手紙はブレンダ・R・シルヴァーの引用による。ケインズ評はベル『ウルフ伝』より。Brenda R. Silver, "Three Guineas Before and After: Further Answers to Correspondents," in *A Feminist Slant*, pp.260-61; Quentin Bell, *Virginia Woolf: A Biography* (2 vols.; San Diego: Harcourt Brace, 1972), II : p.205.
- (7) Silver, passim.
- (8) キャロルは「個人的なことは政治的なこと」をスローガンに、最も私的な場にフェミニズムの問題機制を見ていくラディカル・フェミニズムの立場にウルフをなぞらえる。また、メアリー・デイリーの言を引いて、『三ギニー』が女の状況をただ叙述するテキストではなく、「名指す」テキストであると結論づけている。Berenice A. Carroll, "To Crush Him in Our Own Country": The Political Thought of Virginia Woolf," *Feminist Studies* vol.4, no.1 (1978), passim.
- (9) Bell, p. II : 204.
- (10) Perry Meisel, *The Absent Father: Virginia Woolf and Walter Pater* (New Haven: Yale Univ.Press, 1980), p.234.
- (11) Pamela L. Caughie, *Virginia Woolf and Postmodernism: Literature in Quest and Question of Itself* (Urbana: Univ.of Illinois Press,1991), p.116; Shari Benstock, *Textualizing the Feminine: On the Limits of Genre* (Norman: Univ. of Oklahoma Press), p.137.
- (12) 兄の死骸を葬ってクレオンの法規に触れたアンティゴネーは、クレオンの責めに対しこう答える—「だっても別に、お布令を出したお方がゼウスさまではないし、彼の世をおさめる神々といっしょにおいで、正義の女神が、そうした掟を、人間の世にお建てになったわけではありません。またあなたのお布令に、そんな力があるとも思えませんでしたもの、書き記されてはいなくても揺ぎない神さま方がお定め掟を、人間の身で破りすてができませんなど。」ソポクレス作、呉茂一訳『アンティゴネー』(岩波文庫、1961)、34ページ。
- (13) ジュリア・クリスティヴァはヘーゲルにならって、二つの法を「人間の おきて」(男、政府、倫理秩序の法)と「神々のおきて」(女、家族、死者崇拝、宗教の法)とに区別する。「結局は、死の法、しかない」と認めることは、「法」による死者の数を減らすことになりうる。」クリスティヴァ著、棚沢直子・天野知穂子篇訳『女の時間』(勁草書房、1991)、36ページ。しかしウルフにおいては、後者から「死」の要素は徹底的に拭き去られている。例えば、『三ギニー』で、アンティゴネーが後者に殉じて縊死するというエピソードは抹消されており、あくまで彼女はクレオンに墓穴に幽閉されて殺された、ということになっている。ウルフにとって、「人間の おきて」こそ「死の法」だった。
- (14) Woolf, "Mr. Bennett and Mrs. Brown," *The Captain's Death Bed and Other Essays*, ed. Leonard Woolf (London: The Hogarth Press, 1942), p.104.

- (15) Jane Marcus, "‘No More Horses’: Virginia Woolf on Art and Propaganda" *Women’s Studies*, vol.4 (1977), p.267.
- (16) Alex Zwerdling, *Virginia Woolf and the Real World* (Berkeley, Univ. of California Press, 1986), p.259.
- (17) 「ウルフの省略記号は、口に出せないという理由—すなわち許されないという理由、そして/あるいは、まわりの文章に適さないという理由で省かれたものに向けられている」—Rachel Bowlby, *Virginia Woolf: Feminist Destinations* (Oxford: Blackwell, 1988), pp.161–62.
- (18) エリザベス・エイベルは『三ギニー』における女性像の希薄さについて指摘している。エイベルによれば、母の不在はファシズムの母親礼賛に対する警戒の結果であり、また会計係たちの弱々しさは、選挙権を得て急速に下火になったフェミニズム状況の反映だという。しかしウルフはそうした状況を踏まえつつ巧妙な反撃を試みているのであって、エイベルは重要なポイントでさりげなく示される「母」を見落している。Elizabeth Abel, *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1989), pp.84–107.
- (19) 母親業の評価は、性的役割分業を唱道する父権的言説にあやうくも接近してしまう。ウルフはその対策として、第一にそうした言説—「女の世界は家族、夫、子供、家庭」と断じるイギリスの新聞記事とヒトラーの演説—を名指している (TG,229)。第二に女性の背後に閉鎖的な「父権的システム」前方に果てしない利潤追求を繰り返す「職業システム」を置き、どちらにも与しない「橋の上」の視点を設定して、〈市場〉とその〈外部〉という公私区分を拒む (TG,240,261)。第三に職業につく準備段階としての大学教育に、全面的な支持を与える—第一部で現行の教育制度は反戦に殆ど寄与しないとしながらも、何の要求も付けず一ギニー送るのは、おそらくこのためである。教養を解体する (uneducated) ためにはまず教養を身につけること (educated) というのは、ウルフの終始変わらぬ信念であった。例えば『私ひとりの部屋』の結びの部分には、「いくばくかの時間を過ごし、いくばくかの学識を頭に詰め込んだなら—皆さんはその種の知識をもう充分お持ちでしょうし、大学に入られたのは

その種の教養をあとで見直すためもあってだと思うのですが (“you... are sent to college, partly, I suspect, to be *un-educated*”)—きっと皆さんは次の段階、つまり非常に長く、非常に苦勞の多い、きわめて目立たない活動を始めなくてはならないでしょう」とある (RO,148;イタリック引用者)。しかし第一段階として教養を重視することは、女性の権利の擁護に貢献する一方で、階級的枠組を支えることにもなる。ウルフが『三ギニー』の議論を最初から〈教養ある階級〉すなわち中産階級に限り、労働者階級への感傷的共感を戒めているのは、教養を不可欠とみなす立場の当然の帰結である。1940年、労働者に向けた講演の中で、ウルフは来たるべき戦後の階級なき社会に文学の危機を予想し、聴衆に公共図書館を利用して、自分の手で批判能力を養うよう呼びかける。その一方で、私信では「十四歳で学校を終えた人々にシェイクスピアを読まなくてはなんて言っても駄目だと思いました。...私たちはどんな教養を身につけるべきなのでしょう」と書いている。有名なウルフ攻撃でリーヴィスの非難が集中しているのは、このウルフの「教養」に対する疑問と肯定との間の揺らぎに対してである。リーヴィスがウルフを「社会の寄生虫」とまで呼んでいるのは、ショーウォルターが了解しているようなウルフの階級認識の欠落のせいではなく、リーヴィス自身も属している階級の限界を見定めようとする眼差しのせいであった。Woolf, “The Leaning Tower,” *The Moment and Other Essays*, ed. Leonard Woolf, (London: Hogarth Press, 1952), pp.105–125; eds. Nigel Nicolson and Joanne Trautmann, *The Letters of Virginia Woolf*, 6 vols. (New York: Harcourt Brace Jovanovich,1980), VI: p.420; Leavis, p.413; Showalter, pp.294–297.

- (20) ウルフは『三ギニー』に見られる過去の読み方を、伝記文学にモダニズムをもたらしたリットン・ストレイチーの批判的な読みを通じ学び取った。1927年のエッセイではウルフは伝記を年代記から小説に近づけたストレイチーを評価していたのに対し、1938年のエッセイ「伝記の技法」においては、その伝記と小説の融合という試みを批判する。芸術家ひとりに確信されるヴィジョンの真実らしさをむねとする小説と、情報の正確さを主眼とする伝記とは相容れないも

のであり、「新聞、手紙、日記という形で、あらゆる角度からあらゆる性格に一千台ものカメラが向けられる時代にあるのだから、伝記作家は同じ顔についての相矛盾する説明も受け入れるようにしておかねばならない。伝記は変わったところに鏡を吊り下げることですらの範囲を広げるだろう」とウルフは論じる。これは夥しい事実をコラージュ風に並べ、同じ事実を幾通りもの角度から提示する『三ギニー』の技法を、的確に説明している。Woolf, "The Art of Biography," *The Death of the Moth and Other Essays*, ed. Leonard Woolf, (London: Hogarth Press, 1942), pp.124-25.

- (21) Paul de Man, *The Rhetoric of Romanticism* (New York: Columbia Univ. Press, 1984), pp.67-82.
- (22) Benstock, p.145.
- (23) オックスフォード版の "feminist" (302) は序やホガース版を見ても明らかな誤植なので、ここでは "feminist" とした。
- (24) ブラックは母親業への国家助成金を求めたエレノア・ラスボーンの「ニューフェミニズム」にウルフの主張を関係づけている。Black, pp.190-91.
- (25) 30年代とは「自伝、手紙や日記の公版、『私は』という言葉が入った自己暴露的な題名、きわめて自己中心的な自分の解明(『なぜ私は書くか』)が過去に例を見ないほど繁栄した」時代である—Valentine Cunningham, *British Writers of the Thirties* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1988), p.214.
- (26) Ernest Jones, *The Life and Work of Sigmund Freud* (New York: Basic Books, 1955), II: p.421./ペギー・カミュフは『私ひとりの部屋』にフーコーを導入し、『部屋』のフォン・X教授の風刺画に見られるウルフの男性主体概念を修正する—「特権の起源に『男』を見てしまう程度に応じ...、人は『ファロソフィ』("phallosophy")の最も明白な嘘に欺かれることを逆説的に選択しているのだ。」だとしたらウルフの仕掛けたこの「どくろ」は「特権の起源」と「男」とのずれを見定めている点で、『部屋』と『三ギニー』の重要な違いを物語っている。Peggy Kamuf, "Penelope at Work: Interruptions in *A Room of One's Own*," ed. Rachel Bowlby, *Virginia Woolf* (London: Longman, 1992), p.186.
- (27) Woolf, *Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*, ed. Jeanne Schulkind (London: Sussex Univ. Press, 1976). このテキストか
- らの引用は、MBとしてページ番号を本文中にカッコで示す。出淵敬子他訳『存在の瞬間』(みすず書房、1983)参照。
- (28) Shoshana Felman, *What Does a Woman Want?: Reading and Sexual Difference* (Baltimore: The John Hopkins Univ. Press, 1993), p.126.
- (29) Ed. Anne Olivier Bell, *The Diary of Virginia Woolf*, 5 vols. (1982; rpt. London: Peuguin Books, 1983), V: 141. 神谷美恵子訳『ある作家の日記』(みすず書房、1976)参照。